

# ふるさと

(62)

## 羽尾の瘡守稻荷神社

かさもり

「さらしなの里古代体験パーク」西側の明治新道を挟んだ

堂城山の東裾にいくつもの赤い鳥居が連なっています。そ

の鳥居をくぐり一段と高い場所にでると地元で「かさもりさん」と親しまれている「瘡守稻荷神社」があります。今年も、年2回の例祭（節分祭・春季例祭）が盛大に執り行われ、近隣からの多くの参詣者でぎわいました。

また、月並祭（1日と15日）は、早朝6時に宮本組の役員により執り行われ、その太鼓の音とともに、近在の拠り所の神社となっています。

連なった鳥居

「神社縁起」には「天正年中頃羽尾筑前なるもの宮守を命ぜられ、後に諏訪の戦いに従い、戦場にて傷を負い大いに悩まされたが、稻荷大明神を一心に念じ、その結果、全快した。これより瘡守稻荷といふようになつた」と伝えられます。「瘡」とはできもの・傷のことで、かつては本殿の壁に羽尾の民話で語り継がれている「泥団子伝説」「摩り石伝説」等の絵図が掲示されていました。何れも病平癒を願つたものです。現在の神社建物は、大正後期に建てられましたが、江戸時代以前の場所と建物については諸説あり、場所は合祀前の夫々の小社の所在地だつたと推測されます。建物も社務所内に掲示の絵図から現在と同等の規模であったようです。

現在の「瘡守稻荷神社」として形態が整備されたのは、文政10年（1827）からで、天保6年（1835）に、伏見稻

祭神は、倉稻魂命（稻荷大神）を筆頭に、大国主命・太玉命・大宮姫命（大宮売神）・保食命の五社大神が合祀されています。

荷神社から正一位稻荷大明神の社号をいただいています。

これ以降、瘡守稻荷として信仰され、その社名故、一時

は近郷花街からの参詣が絶えず、地元の人々から、養蚕の守護神、五穀豊穣の神様として崇拝されてきました。本殿

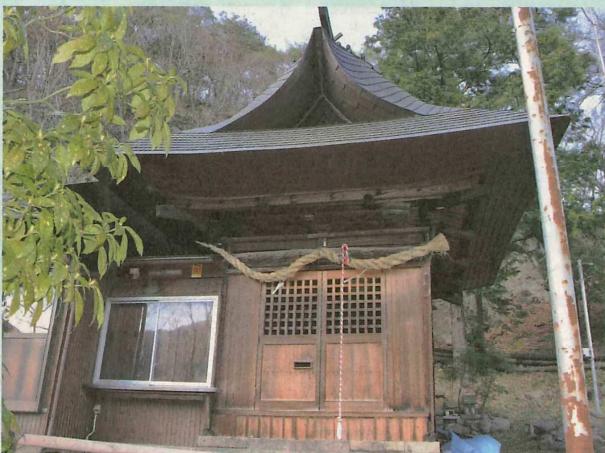
祭壇裏の外壁には、今は安全のため網で塞がれていますが、小動物が出入り出来る円形の穴が開いています。これは、

お稻荷さんに仕える狐の出入り口として設けられたもので、

好物と言われる油揚げをこの入り口にお供えする習わしがありました。今となつては知る人も少なくなりました。

時代とともに、信仰

の形態も変わりつつある神社ですが、越年初詣でに始まり、節分祭のまえに行われる境内の注連縄張り替えは、役員と地域有志の一大行事となっています。中でも3本の大注連縄づくりは後継者を育て、地域の貴重な財産を継承していくためにも大切な場所です。



銅板葺きの屋根の本殿

羽尾 北村主計

また、再建当初から趣のあつた本殿の茅葺き屋根は、茅材の入手難等から昭和50年を最後に修繕が途絶えていました。由諸ある神社存続のため、平成18年に改修委員会が設けられ、同年12月に銅板葺きの本殿屋根の改修工事が終わり、今は落ち着いた風合いの本殿を見ることが出来ます。その後にも、階段の手すりの設置等もおこなわれ、訪れる人々が地元の優しさや思いやりを感じられる神社となっています。

